

大学4年生春時点での, 将来の進路への意識・行動と, 就職決定時期との関連について

A 4th grader of university is about the future awareness to course and relation between the behavior and the getting a job decision time as of the spring.

芦谷 宏子

ASHITANI Hiroko

This research verifies aggressive job hunting reflects the difference in the consciousness to the future course as of the spring, and whether a 4th grader of university is also having an influence on a getting a job decision (personnel unofficially decided). A 4th grader of university was conscious of "college student report II of basic skills" a student took from the item related to job hunting at the inside for the purpose of confirming the feature of the student who has informal designation by October*, and the will was analyzed.

The numerical value by which everything by which the student quick at a result and a getting a job decision (personnel unofficially decided) is "awareness to course and behavior" has was indicated. You could have an influence on the point that the student with clear will steals behavior from the job-hunting front aggressively to job hunting big and grasp the result from which a getting a job decision (informal designation) is also obtained early to course after graduation.

1. はじめに

様々な学年の大学生と日々共に過ごしている中で, 在学中に卒業後の進路を具体的に考えていない, もしくは安易に捉えている学生が多くなっている印象がある。しかし, 文部省のホームページで発表されている『平成30年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査(2月1日現在)』¹⁾によると, 大学(学部)は91.9%(前年同期比0.7ポイント上昇)・短期大学は91.0%(同1.1ポイント上昇)であった。好景気も影響し, 卒業時にはほとんどの学生が就職先を決定している。

本学でも, 在学中における就職そのものへの葛藤とは別に, 就職率はほぼ100%(就職希望者に対する就職率)であり, ほぼ全員就職先を決定して卒業していく。しかし, 就職活動開始時点の前後(大学4年生春)では, 『大学卒業後は就職をする。』強い意識を持っているとは感じられない学生も多々いる。卒業後のキャリア選択の多様化に伴い, 在学中の進路選択に関する価値観も多様化が進んでいるように感じている。

また, 「なぜ働くのか」と言うそもそも論に疑問を呈してくる学生も一定数存在する。これからの社会人スタートの目標を明確に決定していない学生が, 大学4年生の就職活動を前に, 不安や恐怖を感じているような印象もある。在学生から様々な相談を受ける機会が多いが, 「働くこと」へのイメー

じも好印象ばかりではないとも感じる。それ以外にも、就職活動スケジュールについての情報は収集しているが、一斉スタートの就職活動に向かって積極的な行動を取らない学生も多いようだ。実際、学生からの相談や報告の内容は、積極的に就職活動を行なった結果、複数の内定を貰ったと喜ぶ学生もいる反面、就職活動開始時期になかなか行動できず、就職活動が長期間となって辛いと悩む学生もいる。就職活動さえ積極的に行えば内定はもらえるはずの学生は多いが、本人の意欲と行動によって結果に差がでている。

本学のキャリア教育の取組として、1人ひとりの学生が「スキ」を生かせる仕事に就けるよう、1年次から段階的なキャリア形成に取り組むためのプログラムを実施している。企業への就職のみにとらわれず、卒業後の幅広いライフプランの選択について、在学中に時間を掛けて充分検討できるように、初年次セミナーやキャリア形成などの共通教育科目や、就職ガイダンス等で、さまざまなプログラムを提供している。

今までも大学入学時から、就職への意識や活動スケジュールを把握できるように、学生には情報提供をしているが、このたび経団連は、2018-10-9の会長の定例記者会見ⁱⁱで【就職採用ルールを廃止する】表明をした。今年度までは、3月1日解禁のスケジュールで就職活動は開始しているが、来年度からは学生自身が混乱を生じる恐れがあるため、今以上丁寧に情報を発信していく必要性を感じている。

今後、就職活動のスケジュールがより自由度を増すと、意識が高い学生と、なぜ働くのかを悩んでいる学生との行動力の格差が、今以上広がるのではないかと危惧している。

本稿では、就職活動に積極的に行動していない学生と、早々に内定を貰った学生を比較し、どんな点に差があるのかを検証していきたい。

2. 研究の目的

就職問題懇談会の「平成30年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者に係る就職について（申合せ）」ⁱⁱⁱでは、以下の記述がある。

大学等は、以下の就職・採用活動の日程を遵守するとともに、企業等に対して、その遵守を要請する。

- ・ 広報活動開始 : 卒業・修了年度に入る直前の3月1日以降
- ・ 採用選考活動開始 : 卒業・修了年度の6月1日以降
- ・ 正式な内定日 : 卒業・修了年度の10月1日以降

2018年度の一般的な就職活動スケジュールは、大学3年生から4年生に進級する3月に会社説明会が解禁され、10月に内定式が行われている。しかし毎年一定数の学生は、就職活動スケジュールは把握しているはずだが、企業が内定者を対象におこなっている10月内定式まで就職活動を積極的に行っているとは言えない状況にある。もしくは、3月の解禁時点では会社説明会に参加していても、1～2社程度不採用になると、その後の就職活動状況は極端に低下し、4年生の卒業が見込まれる時期1月を超えたあたりから活動を再開し、卒業式までに内定を獲得する学生が一定数存在する傾向がある。

早期に内定を獲得する学生と、就職活動そのものに躊躇する学生の違いは何なのか、どこに原因があるのかを明らかにすることにより、今後の就職支援への対策を得るのが目的である。

3. 全国的な就職活動の準備内容と内定時期

内閣府平成30年度委託調査事業「学生の就職・採用活動開始時期等に関する調査」によると、就職活動を行うに当たり、企業の広報活動が開始になる3月1日より前の時期にどのような活動をしたかをたずねたところ、「業界や企業等に関する情報を収集した」(74.2%)の回答割合が最も高く、次いで「自己分析を行った」「インターンシップに参加した」「履歴書・エントリーシートの書き方や面接の仕方等の練習をした」の順で回答割合が高くなっている。この結果から事前に準備をしている学生が多いことが確認できた。

またアンケートに答えた学生は、平成29年8月1日時点の内々定の状況をたずねたところ内々定を受けた時期について、最も回答割合が高い月が採用・選考活動開始時期である6月の前にきており、「平成29年5月」の回答割合が約3割となっている。なお、累積割合では、6割以上が「平成29年5月」以前に内々定を受けたと回答している。このことから企業側の選考も内々定を出す時期も早くなっていることが分かった。

4. 調査対象者と分析項目

2018年度本学の大学卒業生を対象者とし、大学4年生春に実施した(就職活動開始時期)『大学生基礎力レポートⅡ』の調査結果を基に、〈進路に対する意識・行動〉の結果を中心に検証していく。特に、本学大学4年生の全体の結果と、10月までに内定(内々定)を貰った学生との結果の差異を確認していきたい。なお、10月までに内定(内々定)を貰った学生とは、学生本人がキャリアセンターに[就職内定届]を提出した時点でカウントをした。実際には内定を貰っていても提出していないケースもあり得るが、学生の意識や行動を尊重して提出書類の確認で状況を把握することとする。

また調査結果のデータのなかには、公開することがふさわしくないものが一部あると判断した。全学の結果と内定者の結果の数値を比較し、差異のみを公表する点を事前に了承いただきたい。

5. 『大学生基礎力レポートⅡ』の実施

本学では、入学年次から株式会社ベネッセ-iキャリア『大学生基礎力レポートⅠ・Ⅱ』^{iv}を、毎年全員が受検している。このアセスメントの結果は、本学の学生の性質や思考の特徴を客観的に把握することが可能であると共に、成長が可視化できる事で学生一人ひとりの4年間の学びや進路について確認できるようになっている。本学では、初年度セミナーやキャリア教育などで、このアセスメントを、学生の振り返りと目標の再設定に有効活用している。また、就職活動準備時期には、一人ひとりの学生が必要に応じ自己分析や職業選択のヒントとして、利用することを推奨している。

今回はこのアセスメントのデータ分析をもとに、積極的に就職活動が行なえる学生の要因や資質は何かを検証していく。

6. 〈進路に対する意識・行動〉の調査結果から

(対象学生は大学4年生 n=327 内定者の人数は非公開とする)

今回分析をした『大学生基礎力レポートⅡ』のアセスメント尺度については、進路に関わる意識や具体的な取り組み状況について測定したものを抽出して、本学学生全体の平均と10月1日までに内定の報告をした内定者の結果の比較を基に特徴を明らかにした。

A) 自己理解 肯定回答率の比較

自分の性格や強み、価値観、職業選択における希望条件などを理解しているか。についての質問から、達成率で評価をしている。

全学平均	内定者平均	差異
68.1	71.3	+3.2

全学と内定者の結果を比較すると、内定者の方が3.2ポイント肯定回答の高い結果となっている。内定者の方が、自分のことを理解している達成状況が高い結果となっていた。この時点で自分の価値観、希望、アピールポイントなどの自己理解が進んでいることで、その後の職業選択や就職活動への積極性に、影響を与えているのではないかと推測する。

B) 社会理解 肯定回答率の比較

職業を取り巻く社会や業界動向、仕事に必要な適正、資格などを理解しているか。についての質問から、達成率で評価をしている。

全学平均	内定者平均	差異
62.3	63.8	+1.5

全学と内定者の結果を比較すると、内定者の方が1.5ポイント肯定回答の割合が高い結果となっている。社会のしくみや職業内容を理解しているかどうかの点については、自己評価での差異があまり広がっていない。これはアセスメントを実施したのが大学4年生進級直後で、会社説明会を受け選考が開始されたばかりの時期であり、まだ社会理解に対して、深く理解しているかどうかの認識が内定者も低く、意識の差に繋がらなかったのではないだろうかと推測される。

C) 進路の明確化との関連

将来のライフスタイル、働いている姿ややりたいことがはっきりとイメージできているか。についての質問から、達成率で評価をしている。

全学平均	内定者平均	差異
66.7	68.6	+1.9

全学と内定者の結果を比較すると、内定者の方が1.9ポイント肯定回答の割合が高い結果となっている。希望進路が明確になっているかどうかの点については、文系大学の特徴として企業を応募するにあたり業種・職種の選択範囲は広く、就職活動開始時期にはまだ明確な業種・職種を絞って就職活動を開始するケースは少ない。アセスメントを実施した大学4年生春の時点では、色々な企業の説明会を受け、模索している時期であるため、大きな差がでなかったのだと考える。

D) 進路実現に向けた行動との関連

企業・業界研究や試験勉強、インターンシップなど、具体的な行動をおこなっているか。についての質問から、達成率で評価をしている。

全学平均	内定者平均	差異
59.3	63.8	+4.8

全学と内定者の結果を比較すると、内定者の方が4.8ポイント肯定回答の割合が高い結果となっている。進路を実現するためには行動しなければならないという意識が高い学生は、やはり積極的な就職活動をし、結果として内定に繋がることが証明されている。特に大学4年生の春の時点での結果であることも特筆すべき点で、行動の差が内定に大きく影響をもたらすことが把握できた。

E) 進路に関する意識・行動 総合

A) ~ D) それぞれの測定分野を集計した結果の平均を総合評価として表している。

全学平均	内定者平均	差異
64.1	66.9	+2.8

全学と内定者の結果を比較すると、内定者の方が2.8ポイント肯定回数割合が高い結果となっている。総合的な結果を比べて、やはり内定者の方が卒業後の進路についての意識が高いことが把握できた。

ただ、学生に配布する「大学生基礎力レポートⅡ」結果報告書には、「あるべき姿を100%としたときの達成状況を示しています。70%以上が目安です。」と記載がある。

目安をクリアしたのは A) 自己理解 の内定者平均のみであった。

特にD) 進路実現に向けた行動との関連 これが一番低い数値であった点に注目したい。本学学生の課題が明確に提示されていると受け止め、今後積極的に行動を促す支援を検討していきたい。大学の学びや進路に関しての意識や行動について、今以上学生の資質に合わせる点を重視して、意識や意欲を高めるプログラムを再考する必要があると痛感した。

7. 〈進路に対する意識・行動〉以外で特徴的な結果内容

C) 進路実現に向けた行動との関連 これが一番低い数値であった点を鑑み、積極的な行動ができない要因のひとつに基礎学力が影響を及ぼしているのではないかと推察した。理由としては、採用方法にほとんどの企業が筆記試験を実施しているためである。筆記試験の苦手意識が応募に躊躇をさせているのかもしれないとも想像できる。

「大学生基礎力レポートⅡ」では、【基礎学力】大学および社会で必要となる基礎能力を測定（英語運用、日本語理解、判断推理）も含まれている。基礎学力の結果から全学平均と内定者平均の数値を集計し、校内偏差値の差異を確認した。

	基礎学力総合	英語運用	日本語理解	判断推理
全体との差異	-0.15	+0.02	+0.37	-0.94

学内偏差値で比較をすると、全学生平均と内定者平均の差はあまり見られない。基礎学力総合と比較すると、内定者の方が偏差値の数値は低いことが分かった。就職活動を積極的に行うかどうかは、

必ずしも学力の差ではないことを示している。

8. 今後の課題

今回のアセスメントデータに基づいた検証により、今後の課題として、学生が早い段階での行動を起こせるような支援を考えることが重要である点が把握できた。

そのために下記の2点を熟考していきたい。

1点目は、学生一人ひとりの大学入学までの多様な経験値、環境等の要因との関連性についてである。今回のアセスメントデータは、学生の主観的な自己評価であるため、一人ひとりの意識や価値観・その時々環境などによって結果に差がでると考える。また、アセスメントの実施時期が4年生の春であるため、全体的に就職活動を意識している時期だと考えると、積極的に活動をしているか否かに問わず、関心は高まっている時期ではないかと想像する。今回は内定者の自己評価を全学平均と比較だけにとどまったが、大学入学までの多様な経験値、入試の区分、自宅通学かひとり暮らしなど、様々な要因が関係した結果就職活動に差が出る可能性も大きいと言える。個々の体験と、就職活動への積極的に行動する点についての関連を丁寧に検証してみたい。

2点目は、キャリア教育や就職支援プログラム内容の検証である。一人ひとりの個性、理解度等のばらつきを考えると、講義やガイダンスなど、集団での指導や情報提供では限界があると感じている。本学では、予約制で個別相談を積極的に実施しているが、現在提供している様々なプログラムについても目的・方法・効果についてひとつずつ検証していきたい。必要があれば再構築も検討する必要があるかもしれない。

今回の検証結果を踏まえ、学生の性質に合った支援の提供を検討する重要性が認識できた。集団と個別を分けてバランス良く支援を提供し、学生が、より有益だと感じる、具体的なプログラムなどの作成に積極的に取り組んでいきたい。

註

- i 文部科学省HP
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/03/1414182.htm
- ii 日本経済団体連合会定例記者会見における中西会長発言要旨
<http://www.keidanren.or.jp/speech/kaiken/2018/1009.html>
- iii 文部科学省HP 平成30年度就職問題懇談会申合せについて
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/1403133.htm
- iv 株式会社ベネッセiキャリアHP
<https://www.benesse-i-career.co.jp/univ/service/#sv-report2>

〈キーワード〉

キャリア教育, 就職活動, 自己分析, 社会理解, 行動力

芦谷 宏子 (現代文化学部マスコミュニケーション学科)

(2019. 10. 30 受理)